

O3-019

ペアレント・トレーニングが
親の養育行動に与える影響：事例報告石井 篤子¹、藤野 陽生²¹大阪大学大学院連合 小児発達学研究科附属
子どものこころの分子統御機構研究センター²大阪大学大学院 連合小児発達学研究科

【目的】

神経発達症やその傾向を有する子どもと養育者への支援方法にペアレント・トレーニング(PT)がある。本報告では、X市で実施したPTの事例に基づいて、介入による親の養育行動の変化について考察した。

【方法】

本PTはX市における未就学児発達相談を受けた親向けで、1クール2～4家族ずつが参加した。全4回(①行動観察、②効果的な褒め方、③伝え方・環境の整え方、④気持ちや行動のコントロール)からなり、毎週または隔週、各回90分で「いいところ探し」「宿題の振り返り」「講義」「ロールプレイ」を行った。筆者がファシリテーター(FC)を担当したPTのうち、書面で同意を得た2事例について報告する。セッション中の参加者(母親Y、Z)の発言記録、介入前(T1)・介入後(T2)・フォローアップ(T3; 終了後2～6ヶ月)での質問紙、肯定的・否定的養育行動尺度(PNPS)の得点比較(T1対T2、T1対T3)から、親の養育行動の変化について検討した。

【結果】

主訴は2事例とも「子どもの行動の切り替えの問題」であったが、セッション1では「子どもの良くない行動の否定から入る」(Y)、「褒めるのが下手。子どもを叱ってばかり」(Z)など、褒めることの難しさが語られた。FCはこのような難しさを受け入れ、些細な親の変化も褒め続けた。最終回では、「自分が怒ると子どもと喧嘩になる」(Y)、「堪えて褒めるようになった」(Z)など親自身の気づきや変化を、またフォローアップでは2名とも主訴の問題の改善を、Zは「褒め続けている」ことを報告した。セッション中に子どもへの否定的な関わりを言及することが多かったYとZであったが、PNPSを確認すると、T2では肯定的養育行動の減少と否定的養育行動の増加(Y)、否定的養育行動(非一貫性)の減少(Z)が見られ、T3では、否定的養育行動の減少(Y、Z)、肯定的養育行動の増加(Z)の改善が見られた。

【考察】

これらの事例は開始時の否定的養育行動の多さに特徴づけられていたが、フォローアップ時の否定的養育行動の改善がみられた。一方で即時的な肯定的養育行動増加の難しさが示唆された。改善には、否定的養育行動に気付いた親の変化をFCが取り上げその努力を労ったことは重要であったと考える。親の変化への努力を是認し、親の気づきを情緒的に支える機能をPTが果たした可能性が示された。

O3-020

幼稚園・保育園に子どもを通わす
保護者の感染症に関する知識と
認識に関する研究

佐野 葉子

東京福祉大学 保育児童学部

【はじめに】

保育所保育指針「健康」では、自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行うとある。2020年から新型コロナウイルス感染症が流行した。しかし保育の場においては新型コロナウイルスだけでなく、麻疹をはじめ命にかかわる感染症や、重篤な合併症のある感染症から子どもの命を守ることは必須である。今回、幼稚園や保育所に子どもを通わせている保護者が子どもの感染症についてどのような知識と認識を持っているかを明らかにすることを目的に本研究を行った。

【研究方法】

対象は幼稚園、保育所に子どもを預ける保護者420名で無記名、自己記入式の子どもの感染症の認識に関する調査票を作成し、対象園の施設長に許可を得てから調査を実施した。回収率は53.8%で、有効回答率は100%であった。この226名分のデータを分析した。調査期間は2023年9月1日から12月31日である。倫理的配慮：対象者に紙面で、研究目的、研究方法、研究参加は自由意志であり研究に参加しなくても不利益は生じないこと等の説明を行い、同意が得られた場合に回答してもらった。

【結果】

対象者の性別は、男性6.3%、女性93.8%、続柄は、父親5.8%、母親94.2%であった。各疾患の症状や感染経路などの知識については、インフルエンザが最も多く、髄膜炎菌性髄膜炎が最も低い結果となった。また各感染症の症状を知っていると答えた人は多かったが、合併症の知識が少ないことが明らかとなった。各疾患について怖いと思うかについては、髄膜炎菌性髄膜炎、結核、麻しんの順で怖いと思っており、突発性発疹が最も少ない結果となった。怖いと思う理由は、命にかかわるから、病気を知らないからなどの理由であった。

【考察】

保護者の感染症に関する知識や認識について調査を行った結果、子どもが実際に罹患した疾患については知識もあり、怖いと思っていなかったが、あまり患者数の多くない疾患については知識も少なく、また怖いと思っている保護者が多かった。しかし、罹患したことがあっても、合併症に関する知識が少ないこと、また感染経路についても飛沫感染、空気感染など知識はあるが、血液感染、昆虫媒介感染についてはあまり知識が高くないことは問題であると考えられる。今後は保育の場で、子どもの罹患しやすい感染症について正しい知識を保護者に伝えていく必要があると考察された。